

## 台湾の高等女学校研究

——インタビューにみる女学生生活とその背景（その一）——

山本 禮子

日本統治時代に高等女学校に在籍、卒業した人々の大半は、今日では現役を退き、いわゆる高齢者世代に該当する。第二次世界大戦終結後、五十年を経た今日まで、彼女たちは家庭の中で、また職場や広く社会の中にあつて誇りと品位をもって、光復後の台湾を支え指導してきたのである。もともと蒋介石の率いる大陸からの軍隊が台湾に上陸し、彼らの暴虐ぶりが台湾全土を震撼させた二二八事件およびそれに続く圧政に悩む台湾人にとって、かえって日本統治下の方がよかつたと慨嘆させるほどの事態を招いた一時期があつたのは否めない事実である。しかし、その不穏な状況も落ち着きを取り戻し、今日の台湾は、めざましい経済発展のもとに、生活水準・教育水準も世界の先進国のそれに匹敵するほど向上している。

国会議員・地方議員として働く女性、医師・研究者・教員、

さらに実業界で活躍する七十歳以上の女性たちの大部分は、かつての高等女学校卒業生で占められている。彼女たちの人間形成の基礎を築いた学校教育の実態や家庭の背景に言及してもらうことは、「歴史の証人」としての価値があり、文献資料から得られない生きた貴重な証言資料を提供してくれるものと信じている。

### 一 台南で出会った人々

一九九三年八月七日、埼玉大学教授新井淑子と二度目の台湾訪問。この度は、埼玉大学教授小川瑞穂先生の全面的な支援により、先生紹介の高等女学校卒業生との出会いが実現することとなる。小川先生は台南第一中学校に入学、その後、高雄中学校に転校・卒業され、父上は台湾の中学校ならびに専門学校の

教師・校長の経歴をもつ。現在も台南市のスポーツであるラグビーをとおして友好関係を結ばれ、先生ご自身の訪台はもちろん、毎年のように台南のラグビーチームを招き、長野県菅平で日本チームと親善試合をしている。九三年も八月十一日には台南チームが日本に向けて出立ということで、われわれのインタビューは台南在住の方々から始めることとなる。

八日台南に到着。ラグビー監督蔡宮桂先生ご夫妻の出迎えを受ける。午後七時よりダイヤモンドホテル内の大飯店で歓迎パーティー。ラグビー関係者、およびその家族、総勢十七、八人だったであろうか。私たちの横並びに台南第二高女卒業の方が座られた。台湾での食事の作法を日本語で指示してくださるラグビー会長の姉君に当たる黄玉英さんと大飯店の洪氏夫人の洪辛永春さんの二人。洪さんは日本語の会話がご不自由なので、会食のあと黄玉英さん(台南第二高女一九三七年卒)にインタビューをする。

## (一) 伝道者として生きる黄玉英さん

「正課以外に茶道・華道・書道をしました。茶道の時はきちんと着物に着替えて稽古をしました。臆病を矯正するために弓道をしました。そのため肝が据わり、他人に近寄りにくいとの感じももたれています。終戦の頃「政府の機密をもらした」と言われ、日本人と喧嘩をしました。父は自分の入れ

歯まで捧げ、母は指輪を、さらに二人の弟は学徒として出ていた程です。あとで友達が詫言ったのです」

自己の信念をしっかりと披瀝する彼女の態度は、あいまいな対応を許容しない雰囲気漂わせている。当時の高等女学校入学の条件、卒業後の状況等について次のように語る。

「高女の前は台南師範学校の附属公学校です。この学校で十番以内でないと第二高女には入れません。私の時百名の定員を割って、九十名前後でした。成績と同時に皮膚や目がかしい(皮膚病、眼病のこと―筆者注)と入学できないのです。さらに資産の面も問題になります。税金の関係で資産を少なく申告すると、こんな資産では入れないといわれるのです。卒業後新聞社の速記者になり、終戦後の九月一日から北京語を学びました。その後あらためて神学校に入り、伝道師になっています。自由伝道で日曜、水曜の集会指導をしています。おもに女性対象の集会です。終戦後、日本語で考え、台湾語で話すといった状態でした。八六年まで九年間、YMC Aで日本語を教えました。

私の先輩で莊司雅子さんという嘉義の方がいらつしました。本名は莊無嫌といいます。第二高女を出た後、奈良の女高師にすすみ、卒業後母校に裁縫の先生として赴任してきました。チャイナードレスを着たモダンな方でした。和裁は

他の先生が受け持っていました。義務を終えて、さらに文理大に進み文学博士をとられた方で、日本に帰化されたと聞いています。

無教會的な説教をなさる王さんのおじさんから女学校卒業の頃、十五歳の従兄弟が病死したのを機会に受洗しました。そのおじはドイツに留学し、台湾での第一号の医者です。私は今、七十五歳ですが、主のご用のために働くつもりです」  
清楚な感じとともに、内に秘めた厳しさを感じさせる女性。

「内住のキリスト、これを持っていなければキリストを生きることとはできません」と毅然とした態度で述べておられた。同じキリスト者としての筆者は、襟を正す想いに駆られる。自由伝道を志し、週二回の集会指導をしていらつしやる伝道者である。  
日本統治時代に受洗、キリスト教が弾圧される時代であったために、充分な活動ができなかった。そのため光復後、直ちに神学校に進学したその決断に、頭がさがる。生涯を独身者として献身し、人々のために奉仕する彼女の働きの上に、主の導き・支え・平安を切に祈る。

## (二) 日本語と台湾語の生活の陳雪鷺さん

翌十日、陳雪鷺さんのご自宅を訪問する。ご主人の王生森さん（七十三歳）は、昨夜の会合にご出席。そのお礼を述べつづご夫人との話にはいる。雪鷺さんの日本名は蘇雪子、台北第三

## 高女十八回生、一九四一年卒業

「母の妹に子どもがなく、三歳の時養女になりました。その叔母は公学校の教師でしたが四十四歳でなくなりました。

しかし、二十五年間務めた功績で叙勲されました。私は塩留小学校に入学、その学校は二部式の複式学級でした。警察や道路公安課の子どもが多く、親の転勤で子どもの入れ替わりも激しかったことを覚えています。この学校から、台北第三高女には私一人だけの入学でした。私の姉二人は第三高女です。長姉は九十三歳で健在、纏足の経験者です。次姉は八十七歳で今年亡くなりましたが、十二人の子どもに恵まれています。皇民化運動のころ、蘇雪子となり皆は「せつちゃん」と呼びましたが、先生は「せつこ」がもう一人いたため「ゆきこ」と呼びました。第三高女に十四歳で入学、その年、新校舎が落成し萬華から松山まで机や椅子などを運びました。学校までは汽車通学でしたが皆勤です。毎日六時にでて、塩留から台北まで三十分、台北から学校まで徒歩で三十分、まわりは田圃でした。印象に残っていることは、校長の小野先生が雄弁な方だったこと、和歌・歌舞伎・能がお好きで、授業を通して日本精神を強調なされた。叔母がなくなったときに葬儀にもご出席くださったことが忘れられません。卒業後、公学校の教師を一年ぐらいいやりました。義務ではなく志願し

てのことです。ほとんどの人が教師になったと思います。教師を続けていれば北京語もやっただと思いますが、その必要がなく今日までできてしまいました。高等女学校に行ったことは、よかったと思います。事情があつて入れなかった人がいる中で幸せです。公学校だけでは物足りなかったと思います。現在家庭では、台湾語と日本語を共用しています」

小川教授のご父君が台南一中の英語の教師だった頃、このお宅で生活されたそうである。王生森さんが中学二、三年頃ホーリネスの中田重治牧師が専任として神学院におられた。その頃高進元がそこに入学した。一九三三年のこと、王さんの長兄がチプスで死去、父は落胆。その時、高進元が慰め、キリスト教に導き、その後受洗したという。王さんの父親は京都大学医学部卒業の方であつた。台湾ホリネス教会には、車田牧師もきている。二階には蘇一家が住み、階下に高進元が住んでいた。しかし、戦時中は閉鎖されたという。また、中国大陆からの軍隊上陸とともに不穏な状態が続く台南で、王家の正面玄関はコンクリートで覆うわれ、未だに裏からの出入りを余儀なくされているのが現状であつた。

王家を辞した後、小川先生ご紹介で水産試験場長の義母、趙寶和さんと会う。大正五年生まれ、本年七十八歳というこの女性には華奢な体軀ながら、気迫に満ち、活力溢れる対応に、十年、

二十年以上若い私どもが、圧倒される想いであつた。本人は、公学校(女一学級、男二学級)を卒業後、助産婦学校に二年間行き、一番で卒業した方。その後、役所関係の助産婦の務めをする中で二十五歳で結婚、男二人、女六人の子どもに恵まれ、それぞれその道で博士号をとっているという。子育ての時はメイドを二人雇った由。現在ご入院のご主人のために付き添いと家事担当の人、日中ずつという方と計三人を頼んでいるという。ご自宅の住宅の工夫、別宅の近代的な要素を取り入れた間取りや部屋の構成等を見せていただき、ただ驚嘆したとのみ記しておく。数々の賞を受けられ、助産婦会の会長をも永年勤められた秀逸した人物である。

(三) 眼病のため公立高女入学果たせず、ミッシェンに進学した林甚さん

十日夕方、蔡宮桂氏の配慮で、長栄高等女学校卒業の林甚さんに会う。林甚さん(七十一歳)一九四一年卒業、高等女学校第一回生。夫楊張さん(七十三歳)が同行、日本語は揚さんのほうが達者。彼は台南県麻豆の大地主だった由。しかし、戦後の土地改革で七割没収。蔣介石を憎み、北京語は夫妻で使用せずに、日本語と台湾語に限っているとレジスタンスの決意を語る。彼は公学校卒業後、商業学校に進み、その後、日本の杉並中学校から専修大学に入学・卒業している。元銀行員で、現在

は輸入貿易商に従事。林さんは長栄高女入学の動機や学校生活の様子をつぎのように語る。

「州知事から表彰されていたのですが、トラホーム手術後で第二高女がだめだったので、自分の家は仏教でしたが入学しました。入学して、キリスト教はよいと思いました。学寮の生活でした。朝礼拝し、夜宿舎で礼拝するのです。市内在住の生徒はごく少数なので、学生のほとんどが学寮生で百名ぐらい、高雄や台北からの方もいました。学寮の食費は一月十一円、六時起床で九時か九時半就寝、寮では四時におやつがでます。七時から九時が自由時間でオルガンやピアノを弾いたり、刺繍をしたり、新聞「台湾日報」を読んだりしました。学校での特徴のある教育は、音楽特にピアノのレッスン、英語教育でしょう。東京女子大学出身の先生で今はアメリカ在住です。先生の大半は日本人でした。英語も発音・会話はイギリス人ですが、文法は日本人の先生でした。台湾人の先生は、手芸と音楽の先生だけでした。音楽の林秋錦先生は戦後、台北師範大学の教授になった方です。在学中の校長先生は、一年の時が植村環先生、二年から四年までが番匠鐵雄先生で、教頭は男性の井川先生でした。学校では日本語を使用し、学寮では台湾語でした。」

長栄高女を首席で卒業した林さんは、東京女子薬学専門学校

に推薦入学する。しかし揚氏との恋愛結婚で中退、台湾に帰って式を挙げ、再び東京に戻る。戦時中は中野に住み、千葉に買い出しに行ったこともあると語る。出産にともなうて帰台、夫だけ学生として日本に留ったという。

## 二 高雄高等女学校卒業生との邂逅

### (一) 国会議員になった張瑞妍さんを囲んで

八月十一日、台南から高雄に移動、高雄第一高女同窓会会長、張瑞妍さんにあう。大通大飯店で三人の同窓生を呼び寄せ、一緒に歓談し、高女時代のことを伺う。同席者は洪顯仁、王孫雪珠(ともに一九回 四六年卒)、揚栄枝(一四回生、四一年卒 医師)。張瑞妍さんは元国会議員、高雄高等女学校台湾の同窓会のまとめ役として全体をリードしている。今回のインタビューの設定もすべて彼女の配慮による。彼女は、四二年卒業、その後母校の国民学校の教員として勤務。教員養成機関を経て、台湾人と日本人が半々いる私立の淑徳女学校に、つぎに高雄女子師範の教員を七年勤める。二十九歳で高雄市市会議員になり、五期やってから、七二年立法院の国会議員として立候補し四十八歳で当選、八年間つとめる。国民党は、女性の権利として一人の女性議員を確保した。そして現在は二割から三割が女性議員で占めているという。

—自己紹介を兼ねて—

「一九回卒業の高雄高女には、大和小学校から四名受けて四名合格、港小学校等からも入学し合計十一名、後は公学校からですが、その中には高等小学校にいったりした後に、高女に入学した方もあります」

「女学校を出てから(戦後) 北京語を習いたために、国民学校の教員になりました。結婚に際して退職。現在、毎月第三日曜日に同窓生が四、五十名集まり、おしゃべりしたり、歌をうたったりします。場所はその時の当番が決めるのです。他の学校から羨ましがられるほど、この会は盛んです。そして一緒にの時は日本語でしゃべりするの」

「国会議員になったこのお姉さん(張さん)がいるから、その会合が続いているの。そこでは校歌を歌ったりお話ししたり本当に楽しいの。地方に在住している人からも羨ましがられています」

「戦後、夫の仕事の都合で日本の品川区に数年住みました。三人の子どもは実家の母に預けて……。男の子は兵役があるので国外になかなか出られないという理由があつて、夫婦だけの在日となるの。だからよけい北京語、台湾語より日本語の方が話し易いのです」

—高等女学校の授業—

「私は、前の時間から、つぎの時間の体操の時間を考えて、その時間の授業は耳に入らないの。無敵先生という若い女教師の先生の厳しさは忘れられないの。生理の時も申し出ることもできないほど恐かった。一生忘れられない。とにかく我慢しなければならぬ。でも今思うと、これはたいへんよい教育だったと思う」

「このお姉さんは可愛がられ、三冠王なの」

「私はその先生に『人となり』を学んだと思う。あれもやりこれもやる私に対して、先生は『八方美人』は駄目と厳しくいわれ、恥じ入りました。走るのが早かったが練習が厳しかったので、バレー部に入りたいと先生に申し出た。しかし、バレー部では一年生なのでボール拾い。それで今度は図画に入る。その時、世界的な陸上選手が高雄高女に來たの。自分は運動が好きな。その場でスタートしたら素質があるといわれたの。先生はわざと、『この子はだめよ。三時間と続かない』と。でもそのあとで、『八方美人は駄目よ。ひとつのことに打ち込みなさい。それが成功の本。そのひとつをやリ遂げた後に、ほかのことに着手すること』と厳しく言われたことは忘れられない。

もうひとつは三年生の頃、先生に叱られて涙を流したの。そしたら『それは何の涙?』と聞くの。私は『悪かったと思

う涙です』と言ったの。そしたら『違う。それはやす涙』と。旅行にいった旅館に泊まったとき皆は遊んでいたが、私は本省人。一人隅の方で遊んでいると『みんなと一緒に遊んで遊ばない』と声を掛けてくれた。このように、何かにつけて教えてくれた先生だった。ある時、書道で甲を取ったときも『人間は八方美人では駄目だ』といわれた。『何かひとつに打ち込んで成功すれば、あと何をしても成功する』と。恐い先生だったけれどもよい先生だったと思う。今日の成功の本は、一重にこの先生の指導によると感謝しています。

教師になると生徒に慕われ、国会議員になってもみんながよくしてくれて応援してくれるの。生きている限りはみんなにお返ししたい」

「修身の時間は、堅苦しくて四十分が長かった。簡単でなかった。内容は覚えていないね。眠たくなるような授業だったね」

「私は植民地政策などの考えはなかった。終戦になったときの無条件降伏は嘘だと思ったほど」

――差別について――

「入学試験の面接の時、改姓名していても台湾人の印がついているのを見たので父親にそのことを告げたの。父はそれだけ頑張れと励ましてくれました」

「差別する先生がいました。例えば百点でも一〇〇をつけないの。『自動車か泥だらけになった』という言葉を使われるのです。台湾人は濁りが難しいのです。いわゆるいじめですね。チャンコロといわれたりしたので、歯をくいしばって頑張りました。作文、勤労奉仕も悪い点なのです。修身・国語の先生の差別が目立ちました」

「スポーツ選手の自分は感じなかったのですが、他の台湾の人々は不公平さに不満を覚えていました。皇紀二千六百年に明治神宮の団体戦にやり投げ・砲丸投げの陸上競技で参加しました」

「私は、教員になって始めて差別を感じた。成績は私の方がよいのに、日本人は四十三円で、私たちは三十五円。どうしてなのかその理由を聞きたいと思った。だから視学が来たとき、私は発言したの。『あなた達は私たちを皇国民、皇国民と叫びながら、どうして差別するのか』と。校長も教頭も黙っていることを学校を出て教員になったばかりの若い者がこんなこといってと皆がびっくりした。視学が帰ったあと、皆に『黙っていなければ駄目よ。男だったら大変なことよ』と、忠告された。訓導になると差別はなくなりますが、代用教員、準訓導の時は差別がありました」

このような差別のあった中でも、高等女学校教育について彼

女達は異口同音に「誇りに思っています。今の台湾大学より入学は大変だったと思う。」「あの頃、そういう教育を受けられたことを幸せに思います」と述べる。

(二) 入学の状況や差別について語る高雄高女卒業生

翌十二日、高雄高級中学校を訪問、校長先生とお会いし、その後、会議室で前日面談した方を含め十二名の同窓生の方々と歓談する。

「勉強がしなくて高雄高女を志願しました。商売をしていた父は反対はしませんでした。母は木に高く上ると落ちた時大変と反対しました。しかし私は受験料が二円なので、毎月のお小遣い三円を断って受験したのです」

「私は、六年の成績は五、六番でいい方でした。兄が台南師範学校をでて、公学校の校長をしていました。台南の方がよいのではないか、その方が台湾人は入りやすいと助言してくれましたが、財務課長をしていた父と、纏足をしていた母ですが、この両親に勧められて高雄高女を受験しました。六年の先生は心配したのですが…。百六十五人中十五名の台湾の人がいました」

「小学校にいましたので、高雄高女進学は当たり前と考えていました」

「父は台北の牽村出身ですが、台中中学の一回生で農林学

校に行ったので教育熱心でした。地方にいたのですが、高雄に受験に来ました。卒業後教員になりましたが、結婚後退職しました」

「母が台中高女卒業生。大陸の仙頭にいましたが、日本の高女を受験するために六年のときに高尾に帰ってきて受験しました。父は漢学の素養があり、兄は商業学校を卒業しました。公学校を卒業後、もっと勉強したいので自分から女学校を希望しました。公学校から二人入学、百五十人中十名の台湾人がいました」

「父は百貨店経営、兄は高雄中出身、つづいて私が進学したので家族大喜びでした。公学校からの受験です。弟も高雄中学に進み、慶應大学を出て今は東京で勤務しています。私は卒業後、三和銀行に勤め、戦時中疎開のため退職しました。」

「私は公学校入学して、二年の終わり頃小学校を受験、合格したので小学校から高女に入学しました」

「十人兄弟の七番目です。十人とも小学校に行きました。

高雄高女には岡山から汽車通学でした。一限に間に合うためには六時四十五分の汽車に乗車するのです。当時は下駄履きで通学、校内は裸足でした。姉たちは高雄高女、兄たちは高雄中学を出ました。医者であった父のお蔭です。私は六年生の時ジフテリアにかかったため、高等科に行き、妹と一緒に



入学したのです。一年ちよつと勉強しましたが、その後奉仕作業で芋植え、芋掘り。掘ったものは市政府に供出し、それを配給するのです。統制下の時代でした。近くに軍事基地があり、二年間ほど五十キロ山の方に疎開しました。登校日はそこから学校に登校、でも警報が出て下校ということもありました」

「公学校からの進学です。百人中十二人が台湾人でした。そのうち小学校からが半数の六人でした。公学校からの人の家庭は財産家でした。修身・国語・作業が本島人は六十点代の成績だったのが不満でした。四年卒業後、実践女子大学の家政科に進学しました。昭和十七年卒業後帰台、二十二歳で早稲田出身で三菱火災に勤めている主人と結婚、荻窪に住みました。そこに不発弾が落ちたことがありました。昭和二十一年三人の子どもと共に帰国しました。叔父は慶応出身で三菱商事に勤務、弟二人は日本に帰化しています」

「私は屏東から通学しました。高雄高女に入学した年に屏東にも高女ができましたが、姉が三回生として卒業していたので高雄高女に入学したのです。運よく師範を出た先生がいまして先生の家で夜四、五人が補習を受けました。冬はお汁粉、夏は冷水をよくだしてくれました。屏東から四人、高雄高女に入学しました。学校での印象として、修身の先生の台

湾人への差別を思い出します。屏東から通う私に叔父はポケットに十円を持たせてくれました。先生は一円以上持つてはいけないといって手を挙げさせて調べるのです。私は急な場合があるのでと理由を言いましたが、立たせられました。その上、修身は五十九点、赤点でした。二十歳で外科医と結婚。夫はラバウルに徴用されたので、三人目の妊娠中帰台しました。今は東大外科を出た息子が後を継ぎ、娘も高雄医学院にいます」

「台湾の人は、学校では遠慮して無口でした。日本人は台湾人をリヤといいます。それには侮辱の念が込められているのです。また労働者は臭いともいいます。ある時、友達が家族の統計を取りました。台湾人家族の子どもの多いことを軽蔑したり、九十歳の人に対して『ごくつぶし、死んでしまえ』と暴言を吐くのです。このような台湾人への侮辱に対し、私は怒りました。『あなたがたは他人より多くもらっている。リヤは苦しんでいる。リヤだって人間です』と。日本人の友達には『すみません』と謝りました。日本人が台湾を統治していたことを私は尊敬していました。一時半からのニュースの説明を教師から受け、戦争する日本人を偉いとすら思っていました。血染めの旗を作ったり（これを校長は表彰）、千人針を岡山の憲兵隊に持って行ったりするのです。光復後、大陸が

来たときは教師をしていました。彼らは犬まで料理して食べるのです。日本精神はよいなとつくづく思いました」

「本島人として侮辱されたこともありましたが。しかし同級生の中では人気者で張ちゃんと呼ばれていました。卒業するとき、日本人の友人百人くらいがサインをしてくれました。

終戦後、高雄高女の内輪の会の会長になって、日本人の方がいらつしやったときの窓口になりました。高雄高女の教育はプラスになつても、マイナスになることはありませんでした。

高女に入学していなければ、私の今の人生はなかったと思います。卒業後、屏東師範の臨時教員養成所(授業料十三円)

に入つて検定試験を受けて準訓導になり、母校の国民学校の教師を二年間やりました。昭和十九年に台南師範の講習を受けて二月に訓導になりました。終戦後、高雄中学の講習で北京語と漢文を学びました。実は父は漢学者で詩人でしたが、

統治時代、台湾人の人権を護るために、父は床下に漢籍を隠していました。戦時中、台湾上空で空中戦があり、機銃掃射も激しく、防空壕に避難しました。五、六月頃さらに激しくなり、台南に疎開しました」

「医師の夫が召集されたので、病院は廃止して看護婦も帰しました。その後、お産をして産後四十度の熱をだして奉仕作業にでられない時がありました。その日、日本の巡査が『奥

さんいるか』と来て理由を聞くのでその事情を述べました。

「お前たち台湾人は戦地の兵隊がお国のために勝つまではと頑張っているのがわからないのか」と怒鳴るのです。貧血で奉仕作業に出たら倒れる、また、夫は病院まで閉めて戦地に行っているのと思いました。」

戦後高等女学校時代の恩師を自宅に招待している。短気でよくたたく先生だったけれど、生徒をよくするためにやっていた先生だったと述懐する。

「在郷軍人が、高女に訓練に来ていました。私は窓から一番高い後ろの席にいました。『一番後ろの席は級長ですか』と聞きました。それを聞かれた友人が『あれはチャンコロだから級長なんかなれない』といったのを耳にしました。『何がチャンコロか』とその日本人の首を噛んでしまいました。二人が泣きながら言い争っているところに教師が来て『二人とも目にゴミが入ったのだろう。早く眼科に行き来い』といわれました。彼女のお父さんは衆議院議員で医師でした」

「日本人と一緒に苦労しました。防空壕に逃げたり、その時下駄の鼻緒が切れたり、配給に長時間かかりたり、野菜畑が統制下で余りなかったり、いろいろ思い出します」

「国語の教師の住宅周辺に台湾人労働者が住んでいて、彼等たちが外で食事をしているのを見て『台湾人はレベルが低

い」という言葉を聞くのつらく、また恥ずかしかったことを思い出します。私たちの多くは豊かな階層に属しているのかもしれませんが……」

「三年になると英語部か裁縫部を選択するのです。英語を敵国語だといって廃止になりましたが、敵国語だから勉強すべきだったと思います。日本人は度量が狭いと思います。卒業証書も式もなく、後で半紙みたいな卒業証書を送ってくれました」

「私は学寮の人気者でした。買物を皆にふるまったし、一ヶ月十円から六十円ぐらい使っていました。日本精神は今でもよいと思っています。大和魂、負けるな、志を全うする等。今でもテキパキと行動できます」

#### —女性の職業生活—

「女の子は勤めに出たらいけないというので薬局を二十六年手伝いました。家が医院でしたのでその薬局です」

「女が仕事にでるのは危ないといわれていました。そんなに勉強がしたいのなら、教員になるために屏東師範に行くといいと校長先生が推薦状を書いてくださったのです」

「自分の本分を守る。夫も医師、医師として家庭を守る。家庭第一主義です。家庭が守れないで、外に出るのは反対です。父は同志社出身、母は台北第三高女の卒業生で婦人会長、

近所のトラブルの調整をしていました。父方の叔父が名古屋医科大学の出身。子ども一人一人に女中をつけ、第一本持ったことはありませんでした。買物は雑貨屋で付けてキャラクター、チョコレート等を買ひ、学校に持っていくて食べていました。恵まれた子供時代、一人娘第四人の家族でした。叔父は満鉄の小児科主任の医師で、結婚した相手が東京女子医専をでた医師でした。結婚式は三日三晩がかりでした」

このように語る医師、揚良枝さんの様子を昨日のご自宅訪問の状況を加えながら素描してみよう。彼女は、小学校四年のときから洋服を作っていたので「洋裁学校にやってくれ」と親に懇願すると、一晩中、土間に座らされたという。両親は「洋裁をやるために日本には行かせない。医学にいけ」というので、台南高女のひと二人で東邦女子医専五年制に入学する。東京にではじめて炊事を体験する女性である。しかし、特に不自由は感じていない。生活の知恵を持ちあわせていたと思われる。保証人は厚生省（内務省経済部長）の人で娘・息子を学習院に入れているほどの人。家庭では日本人を借家に住まわせ、よく日本人の面倒を見ていたという。また、兵隊たちが岡山の飛行場に来ると揚さんの家に来て「お母さん（揚さんの母）、明日、×時に××へ行くよ」と報告があり、お母さんは、兵隊たちに砂糖やキャラメルを食べさせるために、大豆と交換して甘味の

物を振舞っている。

結婚後の揚さんは、子ども四人(男女各二人)が小学校に入  
学後、三十九歳で午前中だけ勤務の医師(呼吸器専門の高雄市  
衛生局主任医師)となり、二十七年間勤め六十六歳で定年退職  
している。現在「和紙くるみ絵」の制作や、孫の勉強の指導を  
したりと、悠々自適の生活である。「和紙くるみ絵」は東京飯田  
橋田中和紙の通信販売を利用したり、浅草や西日暮里から和紙  
を取り寄せ、自分で創作して楽しんでいる。さらに十年間ほど、  
医師の働きの傍ら、台湾ではじめての「紙ねんど」の通信教育  
を友人六人と企画・実施したことがある。手作り教材といった  
セットを担当者がそれぞれ工夫を凝らして一セット七千円で頒  
布していたという。日本人以上に日本的な人で、「自分の本分を  
守る」ために家庭に入り、医師である夫の診療所の手伝いをし、  
子どもの手が離れた頃から「自分の専門を活かすことができ、  
患者が治るととても嬉しかった」と語る。五十歳代になって六  
十一歳の夫の急死に遭遇。「年を取ったら趣味を活かして」生活  
しているので、「自分の人生はよかった」としみじみ語られる。  
彼女は、台湾の同窓会に出席してはじめて台湾に友人ができた  
と語っている。

### 三 長栄高等女学校の音楽の教師林秋錦先生

長栄高女卒業生林甚さんの紹介で、彼女の友人揚英英さんが  
恩師林秋錦先生を伴って、台北国賓大飯店でお目にかかったの  
が九三年八月十五日のこと。華奢でモダンな感じの二人の女性  
と食事を共にしながら会話が弾む。音楽一筋に生きてこられた  
林先生は、ほとんど自炊もせず、食べ物は外食か卒業生の差し  
入れに依存しているようである。一九三三年長老教女学校(後  
の長栄高女)卒業、日本音楽学校卒業後、母校の音楽教師とし  
て勤務、光復後台湾師範大学教授として定年まで勤められた方  
である。

「私の母は、外人宣教師の学校に行っていたのです。一つ  
の教会で二、三人の宣教師が教えていたのです。それが大き  
くなってミッションスクールの学校になったのです。代々外  
人の宣教師が校長になっています。ミス・ロイド、ミス・テ  
イラー、ミス・ボルトというように。このミス・ボルトの時  
には日本から監視され、干渉があつたんです。日本の校長で  
なくてはいけないというのです。そこで東京の柏木教会の植  
村環先生に来ていただいたのです。しかし忙しいので一学期  
ぐらいでした。その後、番匠先生をお願いし、終戦までおら  
れました。植村先生の頃から日本人の先生が多くなり、私が

ちょうど四年生の時、女子大出の市川禮子先生という英語の先生がいらっしゃいました。番匠先生の時は金城女学校から大部いらしたようでした。宮城遙拝をはじめ、できるだけ日本のようにしなければならぬ。一杯そういうのありましたですよ。礼拝出席は強制的ではなく自由でしたが、寮生は全員で先生を呼んで礼拝を守っていました。日本の中に軍隊に対する何かがあったようで、番匠先生は台湾の人に誤解されたこともありました。よく解りませんし、私はそんなことだいつきらいなの。何か日本からいろんな圧力、それはありました。

卒業して一年たって上海にいつて、音楽習おうと思ったの。台南一女をでた姉と同じ時期に、姉は北京、私は上海の学校に入ったんですがたいしたことないので、姉を呼んで日本に行ったの。それが中野の日本音楽学校というところです。卒業時に各学校のオールジャパンの音楽会があったんです。日比谷公会堂です。私ともう一人の日本人とが出たんです。それで、出たもんですから顔はみられるし、読売新聞には出るし。ミス・ボルトなんて早く帰ってきなさいの一言。私若いので帰りたくてしょうがない。それで帰ってきたんです。そして十三年半教えてきました。植村先生、番匠先生がいまして、あの時代は私たちもこの場さんたちも得をしています。

それまではミッシェン系は大したことがないという風潮があったけど、私が帰った頃から生徒も威張っちゃった。なぜならね、音楽会やら催し物があるんですよ。私が帰ってから、英語と音楽は他の女学校に負けません。教材に教科書は使っていません。やさしいし、おもしろくないのです。「流浪の民」「ウィーンの森」等プリントして、三部、四部の合唱をしました。また、放課後大部分の生徒にオルガンを教ええました。そのため試験を受けて公学校の教師になった卒業生もいます。私は日本人にいじめられて泣いたなんてことないの。十三年半で辞めて、台湾師範大学の音楽系教師になりました。入ったら他人に負けませんから、すぐ助教授、それから教授になって、三十三年勤めました。

退職後、今は教会関係の合唱の練習の指導、礼拝奉仕、孤児院の奉仕、十名前後の校友生の集まりへの出席、年二回の百名ぐらい出席の校友会総会への出席等、多忙にしています」林先生を支えるようにかばう揚さん。多くを語ることをなさらなかったが、入学の動機や卒業後のことを手短かに語られた。「長栄高女への入学の動機は、公立高女にはいれなかったからです。林先生は学寮にいらっしゃって日本人の先生とは、だいぶ違う印象がありました。林甚さんとは公学校も一緒にした。私たちは、他校の生徒に比べて日本語は下手だと思

ます。卒業後は、東京の杉野ドレメに一年参りました。昭和十七、十八年のことです。帰国はあの高千穂丸の後で、一週間ぐらい船に乗っていました。その間、魚雷に三回当たったのですが、無事帰国しました」公立学校のみならず、私立のミッションスクールにも日本の支配力、統制力が浸透していく様子の一端が林先生、揚さんの会話の中から読み取れる。

一九三〇、四〇年代のキリスト教主義学校状況については、他の論文で詳論したので参照して欲しい。<sup>(1)</sup>

#### 四 陽明山に集まって語る台北第二高女の卒業生

八月一六日、陽明山にある中国飯店で、十一名の方々が集う。

卒業年次は一九三四年から四四年と開く。特に四四年入学者も二名参会している。皆が揃うまで、アンケートの記入を依頼する。「このアンケート書いて、自分の存在を改めて認識されます。そして、歴史の証人になったようなね」との発言に、皆が頷いているのが印象的であった。

—高女における差別を巡って—

「女学校時代は差別を感じなかった。あるのはせいぜい小学校の時ね」

「私も小学校の先生ね。三人の担任の先生の中、二から四年の時の担任の先生が、すごく台湾人を軽蔑して、区別する

の。台湾人はみな悪い成績。勉強できてもみんな悪い成績」

「ところが本当は台湾人の方が成績いいのよ」

「あの時みんな優良可でしょ。大体みんな良をつける。可をもらうような生徒はいないでしょ。だから優をあげないで良をくれたんですよ」

「成績のいい人でもほとんど良しかもらえない。でも五、六年になったときに先生が変わり、本当の成績が出るようになって、私はこれだけの成績がとれるのだと自分で分かるようになったんですよ」

「そうでなかったら内申書が悪くて、二高女には入れないわよ」

「あなたのクラス、台湾人何人だった。私のクラス五十人で私一人だった」

「私のクラスは三人か四人」

「ところがね。台湾の人が何人もおるわけよ。それで出身を聞くわけ。例えば日本の長崎とか東京とかね。最後に台湾の人はって聞いたら、手を挙げたのは私だけなのよ。改姓名だけでなく、台湾の籍じゃないんです。私、今でも不思議に思うのね」

「台湾の人改姓名の時にについてに出身地も変えちゃったんじゃない」

「日本人とくに養子縁組みを沢山の人がした」

「当時、改姓名、国語家庭は配給品の量が違ってくるんですよ」

会話を聞きながら、改姓名とともに、本籍までも当時の内地に変更していたことが窺われるが、同期の人数が少ないだけに確認は取れない。子どもながら不思議な現象として記憶に残っている事件である。ともあれ、日本人の家庭はもちろん、国語家庭は日用品の配給が多いという特権があり、さらに進学にも有利だとすると、当時の台湾人の生活の知恵として、様々な工夫を凝らしたとしても無理からぬことであつたと思われる。当時第一高女、第二高女を受験するのは一種の賭であつたという。第三高女だと平均六〇点、六一点で入学できたが、日本人の高女に台湾人が入学することは狭き門であつたようだ。

―高等女学校の様子―

「昭和十六年頃、学校で『シャンプーの使い方』『マッサージ(美容)』を教え、今も続けています。高女では『強く、やさしく、淑やかに』の良妻賢母教育でした」

「卒業前実習として西洋料理のマナーを鉄道ホテルで行いました。授業前に黙想する裁縫の先生がいました。先生は着物を着て草履を履いているので、歩いて来る音がしないので、教室の後ろから入ってきて騒いでいる人をエンマ帳につけて

いたのを思い出します」

「理科の先生は実習時間にうるさいとその人を注意し、お盆の上にハンカチをのせ髪の毛一本ずつ罰として切っていました」

「ダンスの先生が『あんた達の歩き方は悪い。こうゆう風に飛ぶ』とお手本を示そうとして滑つたのを見て、生徒たちは拍手をしてしまいました。何時もダンスのことをいわれるので悔しかったので恨みをはらしたのでした。可愛がってくださった担任の先生のお家まで行ったこともあります」

「当時は勉強より作業といわれ、いも畑に大きな鋤を持って行きました。作業は修身の点になるので一生懸命やりました。軍服の繕い、陸軍病院の慰問、銃磨き、雲母剥ぎ、田植え等もやつたのです」

「昭和十七年の明治神宮に、バレー部・陸上部等に二人で行くわけでしたが、戦争で行けなくなりました。修学旅行も昭和十六年まで四年生は行つたのですが、十七年から島内旅行になり残念でした」

「昭和二十年五月三十一日の空襲で直撃弾を受けて校長の吉中先生が亡くなりました。前任の校長は『英語なんか習う必要はない』と言っていたのを思い出します。十七期にお嬢さんがいました」

「戦後、地理の時間に教師が『支那』といったので、私は手を上げて『支那ではありません。中華民国です』と発言しました。それから先生は『中華民国』と言い直しました。さらに上級学校に行く人を集めて激励しました。それまでは婦徳の涵養でした」

「そういえば一中、二中、三中、こっちは一、二、三女でちゃんと割り当てられて、生徒のお弁当を作った」中学生の演習のときにお弁当を作ってやるの。お弁当と言ってもお握りを。二高女は三中でした。三中は日本人が多いのです」

―四年制度の高等女学校と進学―

「植民地の女学校はみな四年制度でした。一高女は五年制度にするために運動をするのです。しかし当時の行政側は五年にするより入学者を増やそうという政策になったようです」

「それでクラスが増えるのですね」

「そこで国内は五年制が多いので入学試験の時にハンディがあった。例えば数学では幾何や三角関数とかはやっても級数はやってない。そこで損をするのです。そこで日本の専門学校に入るときは予科に一年入ってからということになります」

「後で女学校を出て専修科という主として裁縫をするのが

あったんです」

「補習科というのもあり、それは三つに別れていて、家事専攻と小学校の先生になる検定試験受験のための専攻、さらに上級学校にいく予備科がありました」

「男子は高等学校が四年から受けられた。秀才のはいる唯一の高等学校だったわけ。その中に台湾人はちょっとだけしか入れないわけ。理科の甲は英語専門、乙はドイツ語専門。あの時の医学部はドイツ語専門、台湾人は判事になる道が開かれていなかったわけ。それから貿易とかあまりないし、大きな工事計画も上に立つのは日本人、内地人でないため。結局医者になるのが唯一のエリートに進む道だったのね」

―卒業後の進路について―

「英国人と結婚しているジームスカエという校長がいる洋裁学校に進学しました。その学校は二年間を出るとすぐ女学校の先生になれたのです。私は成蹊実践女学校で洋裁や絵を教えた。その後、空襲が激しくなって陽明山に疎開したの。その舎監でしたので、生徒と爆弾がどんどん落ちるのを見るんですよ。真っ暗な中で。警報が解除になると山から降りて家がどうなったか見るの。また上がってくるの。当時トラックは誰でも載せてくれた。材木いっぱい積んであると、その上に乗かって山から降りるんですよ」



「三高女の人が何か、篤志看護婦としてパラオとか南洋に行っただんですよ」

「二高女もやったのよ。校長室に呼ばれて、篤志看護婦にならないかって。Sさん志願したのよ。だけどやめたの。私、あんた志願したのって聞いたら、うんって。でもその篤志看護婦は慰安婦ではなく、本当に看護婦だったのよ」

「大体の篤志看護婦はそういうのが多かったのです。三高女は団長が日本人でした。その人は今行方不明なんです」

—自分の生き方への影響—

「昔あった情操教育はよかった。今の学生には全然ない。学問だけ」

「今は知育だけね。知育といっても理科もろくにないし。音楽も。平均してないの。当時の日本の教育はいろんな部門に平均していた。今の教育は方針だけだったらそれこそナンバー一ですよ。知育、徳育、体育、それから美育。実際にそれをやっていないのです」

「憧れて入った学校です。だから、光復後、今の第一女子中学校の場合、三つの学校(第一、第二、第四)が学区に入っただけですよ。しかし、校友会となると撫子会(第二高女の同窓会名―筆者注)のほうがいいのです」

「三つの学校で四年生全部合わせて百人いなかった。先生

がいなかった。先生自身が中国語が出来ないので、ほんとに苦労しました」

「地方だと北京語をはなせる人がいないと、さしあたり過渡期だから地方語、例えば広東語で教えていたの」

同窓生の方々の話は尽きない。この中に一年前、国立中央研究院の游鑑明さんから紹介された姜萃香さんが同席されていた。彼女は高女卒業後、現昭和女子大学に進学、終戦後、再び来日し東京大学の教育学部の研究生として研鑽を積みながら、台湾の中学校の教師、校長を定年まで勤められた。現在は軍の日本語講師として国防語大学校に勤務している方である。日本留学中は、子どもを実家の母に預けてのことであつたという。はじめて台湾を訪問したときにお会いし、日本人の口に合うシュウマイの店でご馳走になる。そこで話を聞きながら、台湾人の勤勉さに驚嘆したことが忘れられない。

(注)

- (1) 山本禮子「日本統治下における台湾キリスト教主義学校の相剋―長栄高等女学校の軌跡―」富坂キリスト教センター編「近代日本のキリスト教と女性たち」所収 新教出版一九九五、一一
- 山本禮子「植民地末期における台湾キリスト教主義学校の相剋」『アジア文化研究・四号』一九九七、六 (本学教授)